27PE-pm060

華岡青洲麻沸散(通仙散)の再検証

○山田　健二[1], 佐藤　弘人[1], 福留　正明[1], 伊奈　郊二[1]([1]東京薬大薬)

【目的】文化元年（１８０４年）１０月１６日、華岡青洲は全身麻酔下に乳癌手術を行った。そのとき用いられたのが麻沸散（通仙散）である。漢・蘭・和の当時の薬物を組合せ改良開発した麻沸散、青洲は動物実験を行ったとされているが伝聞の域を脱せず文献上に見当たらない。そこで、青洲と同じ処方で麻沸散を作製し雌雄ラット、雌雄マウス、卵巣摘出ラット等を用い麻酔状態が得られるのか再検証した。

【方法】チョウセンアサガオ（曼陀羅華）は本学薬用植物園栽培の開花期全草を乾燥後使用した。草烏頭（附子、局方)、白芷（局方)、当帰（局方)、川芎（局方)、天南星（局外生規）はウチダ和漢薬製を用いた。混合割合は曼陀羅華４、草烏頭２、白芷１、当帰３、川芎３、天南星１として土鍋を用い、水にて煎じ煮つめ、ろ過した後実験動物に経口投与した。投与量はヒト成人に与えた量２銭８分（一剤）を基準として 1.0,1.5,3.0,5.0 倍与えた。麻酔状態は正向反射の有無で観察した。

【結果および考察】生後１０週令雄ラットに与えた場合、1.5 倍の投与量で投与後 15～30 分で鎮静状態から睡眠状態となった。しかし、正向反射はプラスで麻酔状態には至らなかった。雌、卵巣摘出ラットでは雄より睡眠時間が延長したが確実な麻酔状態には至らなかった。松本の報告（科学医学資料研究 v30,119,2002）では動物実験の難しさを指摘している。従ってチョウセンアサガオの採取時期、他の生薬の規格、混合割合等再検討する必要があると思われる。また麻沸散の煎じ方、アトロピン、スコポラミン等含有成分の採取時季による変動、各材料間の成分の違いがどのように麻酔効果発現にかかわっているのか検証する。